医事・文談　九百五十八　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その246

子規と漱石（五十五たび続）

そろそろ漱石と分れようと思う、と前回に書いた。子規と漱石は、子規の36歳（数え年）の晩年（というのもおかしいような気がするが）の14年、漱石50歳の生涯（同じく数え年）の中年の14年の交際に過ぎない。共に23歳から36歳までの14年である。この14年の間に、両人の間には共通の友人、知己が居た。同じ学校に学び、同様に文学を志し、俳句・絵画を趣味としたのだから、当然と云えば当然であった。

子規と久保より江、漱石と久保猪之吉、久保猪之吉と長塚　節と、子規からだんだん辿って死床の節にまで（節は子規のまな弟子）及んだ次第である。

先日、書店で田辺聖子著すところの『花衣ぬぐやまつわる…わが愛の杉田久女』をヒョイト手にして巻頭を見たところが、久保猪之吉、より江が共に写っている句会の際の集合写真を眼にした。改造社の『現代日本文学全集』の短歌集・俳句集にもふたりの顔写真は載っているから初見という訳ではないが、同じ場面でのものは珍しい。大正12年のものだ。

久女は虚子に傾倒しながら、日野草城らと共に「ホトトギス」同人を除名され、最後は精神に異常を呈し筑紫保養院（のちの太宰府病院）で、戦後の飢餓時代に栄養失調で死亡するという悲運に逢着したが、女流俳人中でも、一、二に数えられる人である。

かねがね久女については関心があり、猪之吉、より江の写真も載っていることでもあるので、早速求めて一読し、面白くもあり、いろいろ得るところがあった。

久保より江夫人が、俳句の道に進んだのは、大正7年4月からだそうで、大正末年には短歌から遠ざかっていた猪之吉も、熱心な夫人にすすめられて俳句に転じたのであった。

昭和7年は、九大医学部耳鼻咽喉科教室の開講25周年に相当するので、記念句集「春潮集」を編んだという。

その巻頭には

「自分を句作に引き入れた
妻　より江に
此句集を贈る
昭和七年五月　著者」

とある由。

子供がいなかった久保夫妻の家は、福岡の文化サロンとして賑い、同じ芸術にいそしみ琴瑟相和していたので、前述した池上不二子の説のような「嶮しい処生悪路」などは全くの誤伝で、どこからそんな考えが出てきたか理解に苦しむ。

ゐの吉の句に次のようなのがある。

子無き身の心安さよ旅の月

子規→漱石→より江→節→猪之吉→久女と次々に、つながりが出来てくる。

子規が日清戦争に従軍記者として大陸に渡り、非衛生な戦地の生活に、かねての肺患が増悪して瀕死の重症となった。それをどうやら切り抜けて、故郷の松山に帰ってきたら、そこに旧友の漱石が中学の英語教師として居り、その下宿先の上野家の離れ座敷にころがり込んで、しばらく同居生活をすることとなる。その上野家の孫娘が後年の久保より江である。

子規のまな弟子の長塚　節が喉頭結核にかかり、当時耳鼻科の第一人者と目されていた猪之吉の診を乞うために、はるばる福岡へ西下するにあたり、漱石は久保に紹介状を書く。

より江は幼い時に見知った子規の弟子であり、漱石の知人ということで、いろいろ節に親切を尽すこととなる。猪之吉もより江にすすめられ俳句を作るようになり、句集まで著す。より江、猪之吉も福岡の俳句の会「惜春」に入会し、そこで久女とも知り合うということになるのである。

人と人とのつながりは面白い。職業上のつながり、趣味のつながり、婚姻による姻戚としてのつながり、思わぬ出会いでのつながり、とりどりに興深い。人脈という語に近頃、チョイチョイお目にかかるが、これは近来の造語だろうか。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233